

化学教育 徒然草



— コロナ禍のもとでの化学実験 —

MATSUOKA Masatada

松岡雅忠

福岡大学理学部化学科 准教授
化学と教育誌編集委員会 副委員長
化学グランプリ・オリンピック委員会 委員



巻頭言

新型コロナウイルスの影響で、多くの学校では遠隔授業が取り入れられていることと思います。これまでは対面で、また実験室の授業を前提にしておりましたので、慣れない遠隔授業（とくにオンデマンドでの実験や演習）には、ご苦労された先生方も多いのではないのでしょうか。私も、資料提示の際にフリーズしたり、映像や音声伝わらない（伝わっていないことが自分にはわからない）など、対面授業では生じないタイプの焦りや後悔を感じました。

生徒・学生の多くも、キャンパスへ通うことができない不安、在宅での学びへの戸惑いを抱きながらのスタートでした。新型コロナウイルスの影響は来年度もある程度続き、終息後は授業のスタイルが変わっていくと考えられます。手探りの所もありますが、新しいスタイルの授業を学生とともに作っていかう、という気持ちで臨んでいるところです。

アメリカ化学会の *Journal of Chemical Education* 誌では、「Insights Gained While Teaching Chemistry in the Time of COVID-19」と題し、コロナ禍のもとでの授業やオンライン実験などの実践報告が掲載されています。「化学と教育」誌でも、先生方の幅広い実践を投稿いただき、学びを共有できたらと考えています。

ところで私は、中学生や高校生の課外活動の支援をいくつかの学校で行っています。コンピュータの活用や動植物の飼育・観察など、在宅での活動がある程度できる場合は遠隔でも指導しやすいのですが、実験室の活動が主となる化学系の課外活動は、4~6カ月のブランクを経て再始動させることが大変なことを、顧問の先生方ともども感じました。ある学校では、テーマに基づく探究活動を理想としつつも、新入生も加わるように、集まってできる簡単な化学実験や、家庭でできる実験など、絶えず変化する社会状況に対応できるような活動を、生徒主体で模索していると伺い、心強く感じました。

オンライン授業（実験）や家庭での実験をきっかけとした理科探究活動のすそ野の広がり、論文コンクールや地域の研究発表会などで発信できる生徒の発掘と育成が、一層盛んになることを願っております。

[連絡先]

814-0180 福岡県福岡市城南区七隈 8-19-1 (勤務先)